

聖体の秘跡

B・ノヴァク神父（神言会司祭）

キリスト者の生活における聖体の秘跡の重要性を、少しでも意識するために、聖ルカが使徒言行録に描いた初代教会の生活を思い出す必要があると思います。「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」（使 2,41-42）それは、イエス・キリストの昇天と聖霊降臨の少し後、紀元後 33 年中ごろのことです。その時は、新約聖書となった福音書もパウロ書簡も他の書物も何一つ存在していませんし、教会の制度も、あまり発展していません。けれども、聖ルカが伝えているように、もうすでにパンを裂くこと、つまり現代の言葉で言えば、聖体祭儀が行われていました。それを見ると、聖体祭儀は、新約聖書よりも古いものであるということが分かります。さらに、新約聖書は、教会によって造られたが、キリストのからだである教会は、キリストのからだである聖体によって造られた、少なくとも、聖体によって養われ、成長させられたということが言えるのではないかと思います。

イエス・キリストは、救いのわざの中心的な出来事となったご自分の受難と十字架上の死のために、弟子たちの心を準備させたように、聖体の秘跡を与えるためにも、行いと言葉を以って弟子たちの心の準備をさせました。聖体についての一つの「講話」は、聖ヨハネの福音書の 6 章に書き記されています。この話しを聞いた多くの弟子は、次のように言いました。「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか。」（ヨハ 6,60）そして、このようにイエスの言葉につまずいた「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。」（ヨハ 6,66）ということも聖ヨハネが伝えています。イエスの弟子たちのこのような反応に基づいて、教会が次のように教えます。「受難の予告が弟子たちをつまずかせたのと同様に、聖体（エウカリスチア）に関するイエスの最初の予告は弟子たちを分裂させます。・・・聖体と十字架とはつまずきの石です。同じ神秘であって、つねに分裂の要因となるものです。」（カトリック教会のカテキズム 1336）聖体のことを話したら多くの弟子たちがつまずいて、離れてしまうということが分かっても、イエスが聖体の話しをされたのは、きっとそれがご自分の受難と十字架上の死と同じように非常に重要なことであったからに違いないと思います。

イエスは、ご自分のことを「命のパン」と呼んでから、弟子たちに次の約束を与えてくださいました。「あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、

これを食べる者は死なない。」(ヨハ 6,49-50) イエスが、イスラエル人たちが 40 年間の荒れ野での旅の時に神から与えられたマンナを食べても死んでしまったことを思い起こしたのは、この食べ物によって養われたために約束の地に辿り着きましたが、約束の地は救いそのものではなく、救いの前表に過ぎないものであるということをお教えるためでした。真の救いとは、この世のなんらかのものではなく、永遠の命、つまり、神の命に参与して、永遠に神との愛の交わりに生きるということです。約束の地が永遠の命の前表であったように、神が与えてくださったマンナは、これからイエスが与えてくださる「命のパン」の前表でした。マンナが、約束の地に辿り着くことを可能にしたように、「命のパン」は、永遠の命を受け入れること、つまり、神の命にあずかり、神との愛の交わりに生きること、最終的にこの交わりの完成によって神と一体になることを可能にするのです。

おそらく、イエスが「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」という言葉にとどまったならば、ユダヤ人がつまづかなかっただろうが、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」(ヨハ 6,51) という言葉を付け加えたので、つまづいたのでしょう。さらに、彼らが聞き間違えることなく、ご自分が言われたことをよりはっきりと分からせるために、次の言葉を宣べられました。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(ヨハ 6,53-54) つまり、弟子たちが永遠の命にあずかるために、イエスはご自分の体と血、すなわちご自分自身を食べ物として弟子たちに与えることを約束されたわけです。

人間の肉を食べないし、血は命そのものであって、最も神聖なもの、命の主である神に返すべきものであると固く信じて、人間の血だけではなく、動物の血も絶対に飲まず、それを必ず神にささげたユダヤ人が、イエスの言葉を聞いてつまづいても、結果的にイエスから離れても不思議ではないでしょう。一方、十二人の使徒をはじめ、イエスのもとにとどまった弟子たちが離れなかったのは、イエスの言葉を理解したからではなく、今分からなくても、非常に変わった言葉だと思っても、イエスを信頼して、いつか分かるであろうという希望と、どんな形になるかが分からなくても、イエスが与えてくださる命のパンを食べて、イエスの約束通りに永遠の命にあずかるだろうという希望を持ったからでしょう。

カトリック教会が教えているように、聖体と十字架とは同じ神秘です。実際に、イエスの人生全体について同じことが言えますので、聖体のことを理解するために、イエスの人生を全体的に簡単に見てみたいと思います。イエス・キリストは、洗礼者ヨハネから洗礼を受けて、父である神によつ

てメシヤとして遣わされた時から、絶えず罪人の間におられて、彼らに対するご自分の態度、ご自分の行いと言葉によって、彼らに対する神の愛を現し、彼らを神のもとへ、神との和解へと導いてくださいました。イエスは、このようにご自分の人生を神から離れている人のためにささげましたので、ご自分自身、つまりご自分の命、ご自分の体と血を罪人の手に引き渡したと言えます。イエスを信じて、イエスを受け入れた人、イエスに従った人が大勢いましたが、イエスの活動のために、自分たちが執着をもっていた生き方と共に、いろいろな特権を失うのではないかと心配していた権力者たちは、イエスを妬んで、イエスを殺そうとしていたのです。神から一番離れていたこの人たちに逮捕されて、不正な裁判の結果として、死刑の判決を下されても、ご自分の体と血を罪人の手に引き渡したイエスは、この奉獻を取り消すことなく、残酷な拷問をされても、十字架につけられても、罪人の間にとどまって、最後まで罪人に対する神の愛を現し続けたのです。このように、多くの人によって認められ、愛されたときだけではなく、憎まれ、残酷に苦しめられた時にも、人を愛し続けたことによってこそ、イエス・キリストは父である神から与えられた使命を果たし、救いの計画を実現してくださったわけです。すべての人々と神のための奉獻、神と人類との和解を実現された奉獻となったイエスの人生は、今日に至るまで、また、これからも世の終わりまで、すべての人にとって、永遠の命の源になっているのです。

イエス・キリストは、ご自分を妬んでいて、殺そうとしていた人々にご自分を引き渡す直前、使徒たちと共にされた最後の食事の時にご自分の肉を食べる方法、また、ご自分の血を飲む方法を教えてくださいました。この場面を描いている一番古い文書であるコリントの教会への第一の手紙の中で、聖パウロは、次のように書き記されました。「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。」(1コリ 11,23-25) この言葉を語ったイエスは、これからイエスの弟子が行うようにと言われたイエスの記念となる食事の中で、イエスの体をパンの形で食べること、イエスの血をブドウ酒の形で飲むことを可能にくださったわけです。聖パウロが伝えたイエスの言葉にあともう一つの重要な意味があります。後ほど、ゲッセマネのそので、イエスはご自分を人々の手に最終的に引き渡す前に、また、翌日に十字架上で、ご自分を父である神に最終的にささげる前に、今、いわゆる最後の晩餐の時に、パンとブドウ酒という形を以って、ご自分を使徒たちの手に引き渡し、天の父にご自分をささげたという

意味なのです。キリスト者は二千年前から今に至るまで、イエスの命令に従って感謝の祭儀を行うたびに、イエス・キリストの御体と御血、つまりイエスご自身を父である神にささげるとともに、イエスを人々の手に引き渡しているのです。

私たちの手に引き渡されたご聖体、つまりイエス・キリストご自身をどのように扱うかということは、私たち一人ひとり次第です。二千年前のファリサイ派の人たちや祭司長たち、また、その手下のように、悪意を持って、イエスを侮辱するためにその御体を受ける人々を別として、善意でイエスのからだを受け入れるキリスト者たちは、イエスが求めておられるような扱い方をするために、やっぱり、イエスの意向、イエスの望みを知る必要があるのではないのでしょうか。聖体の秘跡は、大きな神秘ですので、それを完全に把握することはできませんが、イエスが行うようにと命じられた祭儀を行う意味と、この祭儀の中で、イエスの御体と御血を受け入れる意味をある程度まで理解するために、二千年の間教会が聖体の秘跡に与えた名称を見ることが非常に効果的な方法です。なぜなら、教会は、聖体の秘跡の新しい側面を理解するたびに、それを表すために新しい呼称を用いたからです。

エウカリスチア

聖体の秘跡の理解は、非常に浅かったときに、弟子たちは司式者が繰り返したイエスご自身の動作を描く「パンを裂くこと」という呼び方をしていましたが、早い内に、エウカリスチア、つまり、感謝の祭儀という呼び方が普遍的になりました。考えてみれば、最後の晚餐自体は、過越しの食事であったわけですので、イエスは、他のユダヤ人と同じように、エジプトから解放されて、豊かな土地と自由な王国をはじめ、神からいただいた他のすべての恵みに感謝されたのです。キリスト者たちは、パンを裂く瞬間とブドウ酒に満ちた杯を回す瞬間だけではなく、イエスの弟子にとってまったく新しい意味を持った過越しの食事全体、つまり聖書の朗読と感謝の祈りをも行ったのです。おそらく、その時、他のユダヤ人と違って、イエスのことをよりよく理解するためにメシアに関する聖書の箇所を選んで読み、感謝の祈りの中で、創造のわざを始め、他のユダヤ人が感謝したことだけではなく、イエスが成し遂げてくださった救いのわざを感謝していたに違いないと思います。今私たちも、感謝の祭儀を行う際に、みことばを聞いて神がなさったわざを思い起こして、創造とあがないのわざを始め、洗礼を受けたことによって神の命と愛にあずからせていただいたこと、いつも、数えきれないほど多くの恵みを与えられることによってささえられ

て、聖化されていことに感謝します。私たちが奉獻するパンとぶどう酒はこの賜物の象徴になっているのです。

最も聖なるいけにえ（奉獻）

聖体の秘跡は、最も聖なるいけにえ（奉獻）とも呼ばれています。それについて、教会は、次のように教えています。「エウカリスチアはキリストの過越の記念、そのからだである教会の典礼の中で行われるキリストの唯一のいけにえの再現、秘跡的な奉獻です。すべての奉獻文には、制定のことばの後、アナムネシスないし記念と呼ばれる祈りがあります。」（カトリック教会のカテキズム 1362）ユダヤ人にとって、神のわざを記念するとは、過去の出来事を思い起こすことだけではなく、神が行ってくださった偉大なわざを宣言することを意味します。さらに、「これらの出来事を祝う典礼祭儀の中で、出来事は何らかの形で現存し、現在化されます。イスラエル人たちは、エジプトからの解放を記念する過越祭を行うたびに、それによって自分たちの生活が活性化できるように、解放の出来事が信者たちの記憶の中によみがえってくる、と理解しています。」（カトリック教会のカテキズム 1363）それと同じように、私たちはキリストの過越、つまりキリストの死と復活の記念を行うときに、イエス・キリストが十字架上でただ一度ささげられた完全ないけにえを現在化すると信じています。そのために、救いのわざが今、ここで、過去のものではなく、現在のものになり、私たちがキリストを父である神にささげ、その奉獻にあずかることができるようになるのです。（カトリック教会のカテキズム 1364）そのためにエウカリスチアは、キリストの十字架上の完全な奉獻と同じように、キリストと教会の最高の奉獻であり、神への完全な礼拝なのです。

主の晩餐

聖体の秘跡は、最後の晩餐の記念でもありますので、主の晩餐と呼ばれています。キリストの代理をしている司祭が、キリストの命令に従い、キリストご自身のことばを述べることによって、パンとぶどう酒の形は変わらないが、その本質は変わって、キリストのからだとキリストの血となります。したがって、キリストご自身が、パンとぶどう酒の外観のもとに祭壇の上に自ら現存なさるのです。その意味での聖変化のためにミサは生けるキリストとの出会いと交わりの場になっています。要するに、聖変化によって私たちは、二千年前の弟子たちと同じように、主と共に同じ食卓を囲むこと、愛の交わりを持つことができるのです。キリストを中心とする

この集いは信者の交わりでもありますので、神の国の約束、つまり神と他人との完全な一致の約束がもたらす希望と喜びの祝いとなっているのです。

ご聖体におけるキリストの現存は聖別のときに始まり、その形態が存在する限り続きます。キリスト全体がそれぞれの形態のうちに、また、その部分のうちに全体として現存されますので、パンを裂いてもキリストが分割されることはありません。また、聖別されたパンやブドウ酒を一部だけいただいても、キリスト全体を受け入れることになるのです。

聖なるコムニオ

聖体の秘跡は、聖なるコムニオという名称をも与えられています。コムニオとは、交わり、また、一致を意味します。聖体拝領すること、つまり、キリストの体を自分の体に頂くことは、キリストとの完全な一致の実現を目指す、愛の交わりであり、その一致の先取りなのです。というのは、イエス・キリストがご自分の生き方、また、ご自分の死を以て示してくださったとおりに愛は、相手のために生きるという無条件の決断であり、相手に自分のすべてを奉獻することです。相互の愛は相互の奉獻になり、深い絆になります。そして、愛は完成されたら、愛し合う人は一体となるのです。結婚誓約の言葉は、そのような愛をよく表しています。「私たちは夫婦として、順境にあっても、逆境にあっても、病気のときも健康のときも、生涯、互いに愛と忠実を尽くすことを誓います。」この誓いを交わして、結婚の絆によって結ばれ、夫婦となった男女は、この誓約に忠実に生きることによって、相互の愛を深め、一体となるのです。夫婦の営みは、身体の言語による愛の告白と自分のすべてを相手にささげ、相手をありのままに受け入れる宣言として、結婚誓約の更新であります。と同時に、そのときに二人が体験している一致は、結婚の目的である二人の一致の先取りになっているのです。それと同じように、聖体拝領するキリスト者は、身体の言語を以て、イエスへの愛を表し、洗礼の約束、つまりキリストと一つになるためにキリストに従い、キリストから与えられた使命を果たすことによって、キリストに自分を奉獻するという約束を更新するのです。

夫婦の交わりが真の愛の表現である時に、結婚誓約の言葉に忠実に生きるために必要な力をもたらすように、聖体拝領するキリスト者は、身体の言語で語ることと自分の真心と一致しているならば、聖体拝領によるイエスとの交わりは、イエスとの絆を強め、日常生活においてイエスに忠実に従うための大きな力になるのです。けれども、浮気したばかりの配偶者は、家に戻って、謝ることも、和解することもなく、奥さんや主人に言葉や身体言語を以て愛の告白をするなら、それは嘘になりますので、この告白は互いの絆を深める代わりにそれを傷つけると同じように、キリスト者

は、聖体拝領の時だけにイエスを愛していると語っても、自分の実践的な生き方によって、イエスと関わりたくない、イエスよりも大切にしているものが他に沢山あると表しているならば、聖体拝領による愛の告白は嘘になり、イエスとの絆を深める代わりにそれを傷つけるのです。このような危険性を意識している司祭は、聖体拝領する前に必ず次の祈りを唱えます。「主イエス・キリスト、あなたのからだと血をいただくことによって裁きを受けることなく、かえってあなたのいつくしみにより、心もからだも強められますように。」もし、キリスト者は、長い間にイエスと関わらないことによって、または、大罪を犯すことによって洗礼の約束を破り、イエスの愛を裏切ったならば、聖体拝領をする前に、ゆるしの秘跡を受けることによって、イエスと和解をしなければならないのです。

ミサ聖祭

ミサ聖祭は、聖体の秘跡のもう一つの名称です。ラテン語では、感謝の祭儀は **"Ite missa est. Procedamus in pace"** という言葉で終わります。それは「あなたたちは派遣されています。平和のうちに行きましょう。」という意味です。私たちが感謝の祭儀に参加するのは、秘跡においてキリストと共同体と出会うことによって強められてから、自分の生活の場でキリスト者らしく生き、イエスから与えられた使命（マタ 28,19-20）を果たすことによって、イエスとの交わりを実際に深めながら、他の人をイエスのもとに導くことができるためなのです。教会は、感謝の祭儀をミサ聖祭と呼ぶことと派遣の祝福によってそれを私たちに意識させているわけです。

日常生活におけるイエス・キリストの記念

愛を告白することは、大事なことですが、人間関係を実際に深めるのは、愛の実践なのです。私たちは、聖体拝領をすることによって、イエスに対する私たちの愛を告白して、イエスとの関わりりの目的である一致を先取るわけですが、私たちのイエスとの交わりを深め、永遠に続く完全な一致を実現させるのは、自分の考え方と生き方をイエスの考え方と生き方に合わせることによってイエスに従って生きること、つまり、信仰と愛の実践なのです。

イエス・キリストは、自分の言葉を行うことの必要性、また、神の御心を行うことの必要性についてたびたび教えてくださいました（例えば：マタ 7,24-27；マコ 3,34-35）。けれども、最後の晩餐の席で弟子たちの足を洗うこと（ヨハ 13,1-17）を以て、この教えを表現し、ご自分に倣って生

きる重要性を特に強く強調して下さったのです。

福音記者聖ヨハネは、他の福音記者と比べれば、聖体についてのイエスの教えを詳しく伝えていますが、最後の晩餐の場面を詳しく描いています。けれども、不思議なことにヨハネの福音書の中に、イエスによる聖体制定については何も書き記されていないのです。聖ヨハネは、最後の晩餐の中心であった聖体制定のことを忘れるはずがなかったのなら、何らかの大事な理由があったと考えられます。おそらくそれは、聖ヨハネが福音書を書いたとき（一世紀の終わりか、二世紀の始まり）の教会の状態、特に、共同体が行っていた主の晩餐のときのキリスト者の振る舞いだったのではないかと思います。この問題について聖パウロが次のように書きました。「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。」（1コリ 11,20-21）そのときのキリスト者は、イエスの命令に従って「パンを裂くこと」、または「主の晩餐」と呼ばれた儀式を行っていましたが、聖パウロが描いている問題、つまりキリスト者は、キリストの記念となっている儀式の最中にさえ、自分のことしか考えないで、愛に背くような振る舞いをしていたという問題が起こっていましたから、多くのキリスト者が、この儀式はイエスによって命じられたものであると分かっても、この儀式の意義とこの儀式を行う目的を忘れていたか、それをまだ知っていなかった、少なくとも、イエスがそれによって目指していた目的に達していなかったということが言えると思います。従って、聖ヨハネは、聖体制定の場面よりも、イエスが弟子の足を洗う場面を伝える必要があると考えたのでしょう。なぜなら、この場面こそが、聖体祭儀に参加することの意義を表しているからです。

イエスご自身が、弟子たちの足を洗ったことについて次のように語られました。「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」（ヨハ 13,14）足を洗うことは、仕えられるためではなく、仕えるためにこの世に来てくださり（マタ 20,28）、人から愛されることを要求したのではなく、自ら進んで出会った人を愛してきたイエスの生き方を象徴的に表すものです。愛に根差したイエスの生き方は、弟子が見倣うべき模範であったということです。また、翌日にすべての人々のためにイエスが実際に命をささげるとも、弟子たちのための最高の愛の模範でもあるということです。同じ晩餐のときに、イエスはこれについて、次のように語りました。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」（ヨ

ハ 15,12-14) 私たちは、聖体祭儀を行うことによってイエスを記念するのは、イエスのように生きることによって日常生活においてイエスを記念し、イエスの愛を多くの人々に伝え、多くの人々を永遠の命に導くことができるためなのです。

キリスト者は、聖体拝領によるキリストとの交わりによって強められて、洗礼の約束と聖体拝領によって表す自分の望みとキリストに対する愛に忠実に生きるならば、イエスから与えられた使命を果たすことができると同時に、キリストとの絆を段々と深め、ますますキリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行うようになり、イエス・キリストご自身の姿に変えられ（2コリ 3,16-18）、キリストと一体になる、つまり永遠の命に入るのです。